抱き締めてＴＯＮＩＧＨＴ

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
抱き締めてＴＯＮＩＧＨＴ

【Ｎコード】
Ｎ１８４２Ｏ

【作者名】
坂田火魯志

【あらすじ】
バーの中で珍しく悩ましげな彼女がいた。僕はその彼女にわざと明るく声をかけて。トシちゃんの最大のヒット曲からヒントを得ました。

第一章

抱き締めてＴＯＮＩＧＨＴ

夜になってバーに行くと。彼女がいた。
けれど何かおかしい。普段と違う。
いつもの勝気な様子がなくて。浮かない顔をしている。長いロングヘアにはっきりとした化粧はいつもだけれど強気の目が何故か伏せられている。端整に着ている膝までの白のタイトも同じ色のスーツも何故か弱く見える。
顔は前を向いているけれど視点が定まってない。やっぱりおかしい。
カウンターにそんな姿で座っている彼女を見てだ。僕は声をかけた。
「ねえ」
「何かしら」
「どうかしたのかな」
笑顔で彼女に声をかけた。わざと照明を暗くしてある店の中で彼女のその白い服が映えている。けれど今映えているのはその服だけだ。
表情も雰囲気も浮かなくてだ。何かどうしようもない感じだ。
その彼女にだ。僕はまた声をかけた。
「何かあったのかな」
「別に」
彼女は僕から視線を逸らして話した。
「何もね」
「何もないって？」
「そうよ、ないわ」
素っ気無い返事だった。
「別にね」

「本当に？」
「私が嘘を言ったことがある？」
「あるよ」
僕はまた笑顔で彼女に話した。話しながらそのうえで彼女の隣に来て言った。
「とりあえず隣の席に座っていいかな」
「いいわよ」
いいと返してきた彼女だった。
「好きにしたら」
「つれないね、今日はまた」
「そうかしら」
「そうだよ。まあいいさ」
「そこに座るのね」
「うん」
僕はここでも笑顔で答えた。
「お言葉に甘えてね」
「何か今日は馴れ馴れしいわね」
「そうかな」
僕は彼女の横の席に座りながら答えた。
「そんなことはないけれど」
「馴れ馴れしいわ。まあいいわ」
「それでもいいんだ」
「許してあげる」
こう僕に言ってきた。
「それもね」
「それは何よりだよ。それじゃあ」
「ええ」
「飲もうか」
まずはそこからだった。お酒からにした。
「そうする？」

「もう飲んでるわよ」
「それは一人でだよね。これからは二人でね」
「それで飲むのね」
「そうだよ、二人で飲もう」
また彼女に言った。
「そうしようか」
「全く。馴れ馴れしいわね」
「けれどそれでもいいんだよね」
「ええ、いいわ」
彼女はまたこう言ってくれた。僕からその顔を少し背けてだ。けれどそれは完全に背けちゃいない。横目で僕を確かに見てのうえだった。

第二章

「それでね。それで何を飲むの？」
「テキーラサンライズがいいね」
彼女の好きなカクテルを言った。
「それにしよう」
「いいわね。それじゃあね」
「まずはそれを飲もう」
こう彼女に言って勧めてだった。二人でそのテキーラサンライズを飲む。赤とオレンジの随分と派手なそのカクテルを飲むと。僕は言わずにいられなかった。
「ねえ」
「今度は何よ」
「いや、ここはさ」
「ええ、ここは？」
「何があったのか知らないしそれはいいよ」
彼女に告げてからだった。
「それはね。ただ」
「ただ？」
「飲むのはいいね」
笑ってこの言葉を出した。
「やっぱりね」
「今更何言ってるのかしら」
彼女は僕のその言葉に苦笑いになって返してきた。
「お酒は百薬の長じゃない。だから今もこうしてね」
「飲んでるんだね」
「そういうことよ。それでもね」
「はい、ここまで」
愚痴はあえて言わせなかった。

「じゃあこれからだけれど」
「どうしろっていうの？」
「外に行かない？」
ここでも笑顔になって。それで彼女に言ってみせた。
「外にね」
「外になの」
「そう、外にね」
また彼女に告げた。
「これから行かないかい？」
「そうね。その勧めだけれど」
「うん」
「乗るわ」
彼女は今日はじめて笑顔になってくれた。
「その言葉」
「そう、乗ってくれるんだ」
「それでだけれど」
乗ると言ってきてから。僕に言葉を返してきた。
「外にっていっても何処に行くのかしら」
「そうだね。夜の街をね」
「ドライブはお酒が入ってるから駄目よ」
「安心していいよ。今日は車じゃないから」
「それだったらいいけれど」
「そうさ。それでね」
また彼女に言ってみせた。その横顔を見ながら。
「キザなことは言わないけれど」
「その言葉自体がキザね」
「そうかな。まあそれでも」
「外ね」
「外で。夜の街でも見ないかい？」
「街だけよ？」

「街には何でもあるよ」
だからだと言ってあげた。ここは。
「だからね。どうかな」
「そうね。ここで飲んでばかりでもね」
「どうしようもないよね」
「ええ。じゃあ」
「行こうか」
こうして僕達は夜の街に出た。赤や青、それに白のネオンが輝くその街に出てだ。僕達は二人歩いた。彼女がその中で僕に言ってきた。

第三章

「奇麗ね」
「そうだろ？月並みな言葉だけれど」
「宝石を集めたみたい」
笑って言われた。
「そういうことよね」
「あっ、わかるんだ」
「何か言いそうだったから。その通りだったみたいね」
「そうだよ。言おうと思ってたんだ」
本当にその通りだった。その言葉を先に言われて。僕としては苦笑いするしかなかった。けれどここで彼女の顔を見てほっとした。
笑っていた。いつもの笑顔になっていた。そのほっとした気持ちのまま僕はまた言った。
「今ね。仕方ないなあ」
「仕方なくても次にまた言うのよね」
「そうさ。僕の哲学は諦めないこと」
実際にいつも言っていることを言ってみせた。
「だからね」
「やれやれね。それでこの夜の街はね」
「どうかな」
「いつも通りね」
とのことだった。
「いつも通り奇麗ね」
「それはいいことだね」
「いいことかしら」
「いつも通りに見えるってのはいいことだよ」
だからだと言ってあげた。今の彼女の気持ちを察しながら。
「それはね。じゃあ今度は」

「別の場所に行くの？」
「僕の家、ってのは駄目かな」
わざとこう言ってみせた。ジョークをふんだんに交えて。
「それは」
「奇襲ね」
彼女は笑って僕に返してきた。
「またいきなり」
「そうだよ。けれどそれは嫌かな」
「いいわ」
けれどだった。彼女は僕のその言葉を受けてくれて。そうしてだった。
「じゃあ行きましょう」
「そこでまた飲もうか」
「あら、そこででもなの」
「そうだよ、場所を変えて飲むのも悪くないじゃない」
「そうね。それじゃあ」
「じゃあ行こうか」
こう話してだった。僕は彼女を自分の部屋に連れて行った。そうしてそのうえでだった。そこでも飲むのだった。今度は楽しく憂いなんかなく。

抱き締めてＴＯＮＩＧＨＴ　　完

２０１０・１０・７

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1842o/

抱き締めてＴＯＮＩＧＨＴ

2010年10月8日10時23分発行